

研究テーマ
「交流学級との関わり方」

1

本実践に関連する児童生徒の実態

対象児童 小学校第2学年

- 課題
 - ・衝動性がある。
 - ・こだわりが強い。
 - ・コミュニケーションがとりにくい。
- 強み
 - ・自分から決めたことは持続しやすい。
 - ・モデルがあると自主的に行動できる。

2

指導目標・指導仮説

教科等及び題材名
自立活動 「交流学級のなかまと授業を受けよう」

目標（本実践終了時の期待する子供の姿）
交流学級でのルールを守って、1時間の授業を受けることができる。

指導仮説
交流及び共同学習において、基礎的環境整備及び学習への取組を促す配慮を行うことで、児童は安心感をもち、主体的に学ぶことができるであろう。

児童生徒の実態

3

指導・評価の計画

◆表1 指導・評価の計画

	主な学習活動	目標	評価方法
1次	交流学級の友だちとの遊びを振り返り、一緒に過ごすよさを実感する。	友だちと遊びたいという気持ちをもち、進んで遊びに行くことができる。	行動観察 写真
2次	交流学級でのルールを確認し、実践する。	交流学級でのルールを確認し、交流及び共同学習を行うことができる。	行動観察 写真
3次	実践を振り返る。	授業で身に付けたスキルを、交流学級での交流及び共同学習に生かし、主体的に過ごすことができる。	行動観察 写真 ポイントカード

◆表2 実践前後の変容の評価

評価内容	評価方法
実践前後での、交流及び共同学習をする様子	行動観察 写真

4

指導の実際①

2年生となかよくなる大作戦

①休憩時間に交流学級の友だちと遊ぶ。

- ・友だちと関わろうともしない日もある。
- ・友だちと自分のやりたい遊びが違う時
→すぐに離れていったり、パニックをおこしたりしてしまう。
- ・友だちへ適切な言葉かけができた日
→友だちにもその場でほめてもらう。

②遊びの様子を振り返る。

- ・できたことを強化
友だちへ適切な言葉かけができ、友だちにほめてもらったことを思い出させる。

5

指導の実際②

行ってみよう！やってみよう！

①ルールを確認し、実践

- ・細かな交流学級のルールになじめず、不適切な言動もみられる。
- ・不適切な言動が出た際
→教室から出てクールダウン

・図画工作「まどをひらいて」

本児の好きな恐竜の博物館を作製し、自分の思いを表現することができた。友だちからも賞賛され、自己肯定感も高まった。友だちの作品を見て感想を言うことができた。



6

指導の実際③

基礎的環境整備

- ・ **通常の学級の担任との打ち合わせ**
→本児が2年生の一員であると思うよう、通常の学級の児童と同じように指導してもらうようにした。
- ・ **全職員への対応の説明**
→職員会で本児への対応を知らせることで、教職員誰でも声をかけやすくなるようにした。
- ・ **交流学級の座席・ロッカーの場所への配慮**
→本児の動線を考えた座席やロッカーの位置を設定。

7

指導の実際④

なかよくなれたか ふりかえろう

適切な行動が出来た際にポイントをためていった。振り返りの際に、自身でポイントを見て実感を深めた。



交流学級での様子を写真に残し、振り返りをした。



8

学習過程の評価

次	学習活動	児童生徒の状況	達成状況
1	交流学級の友だちとの遊びを振り返り、よさを実感する。 ・本児も好きなサッカーをしている場面に教師と一緒にいる。	・友だちとのかかわりを、楽しみながら形成していくことができた。また、その活動を授業の中で振り返ることで、交流学級の友だちと学習したいという思いをもつことができた。	◎
2	交流学級でのルールを確認し、実践する。 ①交流学級での約束事をカードにして学習 ②実際の交流学級の様子を見ながら学習	①友だちと一緒に学習できることは楽しみにしているが、交流学級のひとつの細かなルールに納得はできていない。 ②ルールに納得ができず、授業の妨げになるので、その都度教室を出てクールダウンし、戻ることを繰り返していきうちに、落ち着いて学習できる態度へと変化していった。	△ →○
3	実践を振り返る。	我慢するということを体感し、交流を楽しんでいる状態を本児も保護者も喜んでいる。	○

9

実践前後での児童生徒の変容

実践前	実践後
<ul style="list-style-type: none"> ・同学年と一緒に学習することが難しい。 ・交流学級へ行くことに緊張感をもっていた。 ・休憩時間に同級生を見かけると、不適切な言動が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育の授業でボール遊びをしている場面にすぐ入ることができた。 ・進んで交流学級へ行くことができるようになった。 ・座って授業を受けることができるようになってきた。 ・交流学級の友だちとの関わりを楽しみ、一緒に次の学年に進級したい等の交流を楽しみにしている発言が多くみられるようになった。

10

指導仮説の検証

- 児童生徒は目標を達成したか。
 - ・達成した。
- 判断の理由・根拠
 - ・主体的に交流学級へ行き、授業に参加することができている。授業中不適切な言動がまだあり、十分ルールを守ることができているとは言えない。
- 指導の工夫は有効であったか
 - ・有効であった。
- 判断の理由・根拠
 - ・基礎的環境を整備することで、教室の中での動線がパターン化され、トラブルが減った。
 - ・教職員全体で研修を行ったことで、特別支援学級担任以外の教員でも声かけができるようになり、本児がルールを理解したり思い出したりするきっかけとなった。

11

指導の改善案

成果（よかった点）	課題（改善が必要な点）
<ul style="list-style-type: none"> ・本児の特性を生かした「自己決定」の場を設けたことや、成功体験を得たことにより、交流学級で過ごす抵抗感が無くなっていった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・交流学級以外での交流及び共同学習では、落ち着かなくなることが多い。今後、予想される場面や状況等を想定して、事前に具体的な適切な言動を指導していく必要がある。

成果・課題を踏まえた改善案
・交流学級以外の場面で適切な言動ができるよう、多くの場を体験させ、具体的に指導していく。

12